



Anchor アンカー



『神よ、あなたの道は聖所にあり』詩 77:13 (英)

『われわれは今、大いなる賄罪の日に生存しているのである。』

大争闘下 224

この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨(いかり)であり、かつ『幕の内』にはいり行かせるものである。

ヘブル 6:19

INSIDE

感情、それとも神の約束に対する信仰？

10号

1991年12月

目 的

この出版物の目的は、再臨運動に関する問題を論議するためです。私たちの使命は、これらの問題点を現代の真理に関連させる事です。私達は、すぐ間近に迫った私達の救い主の御再臨に備えなければなりません。

何故新しい形に

「アンカー」を出版しておられる働き人は、福音を広めるために、多方面にわたる働きを大変忙しくされています。時間的に、その方達がしたいと思っておられるように、「アンカー」をしばしば発行することができません。この小さい版の「アンカー」は、2カ月に1回発行されます。大きな版の「アンカー」も2か月に1回、小さい方と交互に発行されます。これにより、私達はどちらか1冊月1回送ることができるように、願っています。

誰が小さい方の「アンカー」を受け取りますか

もし、あなたが「アンカー」に今後も送ってくれるようにと、自分の名前を送っていらしたら、こちらにもお名前があり、両方の版のメイリング・リストもあります。

もし、誰かこの発行物を受け取りたいというような方を知っておられたら、どうぞお名前を送ってください。時々、新しい読者に、続けて受け取りたいかどうかをお聞きします。ストップがかからない限り、このリストにお名前が残ることになります。ご協力に大変感謝します。ありがとうございます。

質問とトピックスの提案

この発行物に関するコメントや質問、またトピックスの提案などがありましたらお書きください。お待ちしております。

感情、それとも神の約束に対する信仰？

「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」(ヘブル 11:1)。

ある時私は、自分の人生に一大転換がなければならぬと考えた。親友の母親からは、一緒に教会へ行かないかと、誘われていた。彼女は、アッセンブリー教会の信者であった。その教会は、異言を信じるペンテコステ派の中でも、かなり大きい方である。私はその教会に数カ月通った後、ついに生涯を神に捧げる決心をした。それはアッセンブリー教会の牧師の導きによるものであった。1965年の事であった。

異言

クリスチャンになった頃、神は異なった教派や、それ

らのくい違う信条を、すべて是認なさるはずはないと私は信じていた。神はその教えが聖書によって証明され得る限り、いかなる宗教に属する人にも耳を傾けられるだろうと、私は考えていた。私はアッセンブリー教会の会衆の態度を観察した。私は彼らの礼拝行為を見て、通路に転がり込み、何度も繰り返し「神を賛美せよ、神を賛美せよ、神を賛美せよ」と言うのが、なぜそんなにも必要な事かと不思議に思った。彼らは私にはいい人達のように見えた。彼らは神を賛美しているのだから、それでいいのだと私は考えた。それでも私は異言を語ることがどうしてそんなに重要なのか理解していた訳ではなかった。私には聖霊の内住が必要だと、彼らは私に言った。

聖霊は私のすぐ外におられると、彼らは言った。異言を語るときにのみ聖霊が自分の内に入られたことを確信できる、と言うのである。このことで私は多少当惑してしまった。

私はこれらの教えをわきにやって、「異言」を語れるようになる前にまず基本的な事柄を研究することにした。初心者であった私は、何が本当に必要なのかを知るために、聖書を研究する必要があった。

セブンスデー・アドベンチストの信者に出会う

丁度その頃、私はセブンスデー・アドベンチスト教会の信者に出会った。彼は私に聖書研究を施してくれ、彼の教えた事柄は、どれも聖書と調和していた。彼が教えてくれた事柄の多くは、アッセンブリー教会の教えとくい違うものであった。研究が進むに連れ、ペンテコステ教会の牧師との衝突はもはや避けられないと悟った。私は牧師にあって話をしたが、彼は自分達の教会が正しいことを私に納得させることができなかった。それで私はセブンスデー・アドベンチストになったのである。しかしまだいくつかの疑問は残っていた。なぜペンテコステ教会の人達は、異言を語る経験を必要不可欠なものとするのだろうか？彼らはなぜそれを、あれ程熱心に追及するのだろうか？なぜそれが終わりの時代には、クリスチャンにとってそれ程危険なものとなるのだろうか？それは『現代の真理』に、どのように相反するのだろうか？

アダムとエバ

アダムとエバは、ある問題を抱えていた。「それ(園の中央にある木の實)を食べると、きっと死ぬであろう」と言われた神を信じるべきか？それとも何か他のものを信じるべきか？「それを食べると神のように善悪を知る者となるでしょう」と言ったサタンの言葉を信じるべきか？との問題は、彼らが何を信じるべきかを彼らに問いかけるものであった。神はご自分の言葉をお語りになった。彼らは何の証拠もなしに、神の言葉を信じるだろうか？それとも彼らは何らかの経験をしていなければならなかったのか？神の言葉を信じるべきか、それともまずサタンが言っていた経験を通るべきか？彼らをより高い境地へと導くであろうと彼らが考えていたその経験とは、食欲におぼれるという経験であった。彼らの選択は、神の言葉に信頼を置かないものであった。代わりに彼らは、サタンの約束した経験に入ることを選んだ。彼らの選択は、神の言葉に相反するものであった。彼らは神の言葉に信頼するよりも、むしろ経験することを選んだのである。彼らは食欲(感覚)を通して誘惑され、その経験を通ることを選んだのである。

ヤコブとエサウ

ヤコブはある問題を抱えていた。彼は双子の片割れと

して生まれたが、弟であった。彼は兄から、長子相続権を奪わなければならないと信じていた。彼は彼のつくったシチューで兄を誘惑して、相続権をだまし取った。しかしそれは、神の御計画ではなかった。ヤコブが生まれたとき、神は彼に相続権を約束されたのである。神の言葉が語られた。約束は確かなものであった。神がお定めになった時に、神の方法で御言葉が成就するのを、ヤコブは待たなければならなかった。ヤコブは信仰を持って待つべきであった。彼は待つことをしないで、自分自信の努力一すなわち経験によって、相続権を勝ち取るうとしたのである。

民と約束の地

神は御自分の民に、約束の地へ入るように言われた。彼らは入って行くことができるはずであった。神が彼らのために戦われるはずであった。しかし、彼らは神を信じなかった。彼らは自分達の生涯一すなわち自分自身の経験を見ていたのである。彼らは入って行くことはできないと確信していた。彼らは自分自身の内に、神が言われたことをする力がないことにこだわっていたのである。彼らは神の約束を軽視した。彼らは神の言われたこと(御言葉)に信頼しないことを選んだ。後に彼らは、神の約束(御言葉)なしに入って行こうとした。彼らは自分達の経験(努力)に頼って入ろうとしたのである。

神の約束

「さて、信仰とは、望んでいる事からを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」(ヘブル 11:1)

神はみ言葉によって、私達に沢山の約束をお与えになった。私達はその約束を信じて、その約束を成就させる神に信頼を置くべきである。神は私達の罪をおゆるしになると約束された。神は私達に永遠の生命をお与えになると約束された。神は私達の生活を変えられ、私達の内にご自分の義を回復なさると約束された。神は私達を皆、天国へ連れて行って下さると約束された。これちの約束は既に私達に与えられ、これらは信仰(御子イエスキリストの犠牲を信じる信仰)によってのみ成就されるのである。私達はこれらの約束を受け入れなければならない。なぜなら、神が御言葉の内に約束されたからである。私達は証拠(いかなる経験)もなしに、神を信じなければならない。ただ神が約束されたという理由で、信じなければならない。それが神の言葉なのである。

しかし私達の中には、むしろ自分自身の経験によって受け入れられようとする者の方が、どんなにか多いことだろう。私達は自分の生涯の内に自分が受け入れられることを示す何かを捜し出して、神に提示しようとはしないだろうか。自分自身の経験に頼っている者が、どれだけいるだろうか。この経験に頼るといことは、神の言葉を拒むことになるのだろうか。信仰のみ、という教えを信じることに失敗すると、それはアダムとエバと同じ

ことをしていることになるのだろうか。私達はアブラハムやヤコブのように、自分自身の行いや、経験によって物事を処理しようとしてはいないだろうか。

ペンテコステ派は？

ペンテコステ教会の人に、「あなたは信仰によって救われるのですか、それとも行いによってですか？」と尋ねるならば、彼は「信仰によって」と答えるであろう。ある者は更に、彼らが教会でしている経験が必須であると、答えるであろう。彼らは「あなたが異言を語るまでは、本当に聖霊が内住しているとは言えません」と言うであろう。「ペンテコステの経験」を通るときに初めて、自分が神によって受け入れられていることを知ることができると彼らは言うであろう。「異言を語ることが、聖霊があなたの内におられる証拠なのです」と。

恐らくペンテコステ教会の中でも、ほとんどの人はこのことを意識的には知らないかもしれない。だがそれは彼らの心の奥底に深く根ざしている思想なのである。知らず知らずの内に、彼らは信頼することができるある経験を、追い求めているのである。彼らがそれを経験するとき、彼らは安心するのである。彼らの「信仰」は真に神の約束に対するものではない。彼らの信仰は自分自身の経験に対するものである。「アンカー」の前号を読まれたならば、経験に信頼を置くというこの教えは、「歪められた信仰」であることが分かるであろう。彼らは自らの内に起こる聖霊の経験に信頼を置いているのである。

これはキリスト教の教えではない。「アンカー」の9号を読んでいただきたい。彼らは神の言葉にのみ信頼を置くべきである。神は信仰によってのみ、ゆるしと救い、そして聖霊の内住を約束されたのである。私達が信じるときにそれを得ることができると、神が言われたので、私達はそれを得ることができるのである。私達は自分の経験に信頼するのではなく、神の言葉を信じなければならない。私達の内になされる神の業（行い）にではなく、私達なしでなされたキリストの業が、私達を義とする（神に受け入れられる）のである。

日増しに成長するペンテコステ教会

かつて私が通っていたペンテコステ派の小さな教会も、今ではその敷地内に小学校を有する教会へと成長している。異言やその他の教会でなされていた行為も、かつては保守的な教会から馬鹿にされていた。今日その運動は、あらゆる教派にまで及んでいると主張している。SDA教会はどうだろうか？ペンテコステ運動は、私達の教会にも侵入してくるのだろうか？

インディアナにおける「聖なる肉体」運動

100年ほど前に米国インディアナ州で「聖なる肉体」と呼ばれる運動が起った。この運動の信奉者達は、特別な光を持っていると信じるセブンスデー・アドベントリストであった。彼らは自分達が聖なる肉体を有し、従って自分達は罪を犯すことができないと主張した。この紙面を割いて、「聖なる肉体」の重要教理に触れることはしない。ここで焦点を合わせたいのは、この運動に伴った肉体的現象についてである。

「聖なる肉体」の教理

次に挙げる引用文は、ホワイト夫人の書いたものではないが、「セレクトッド・メッセージ第2巻」の中に載っている。これは編集者によって付加された注釈である。

その擁護者達によって、「聖なる肉体の教理」と述べられている狂信的な教えは、1900年インディアナにおいて始まった。その中にはカンファレンスの総理や様々な役職にある者達もいた。彼らは、キリストがゲッセマネの苦悶を通過なさることによって、墮落以前にアダムが有していたのと同じ聖なる肉体を獲得されたと主張し、この理論を持って、救い主に追従する者も、天に移されるための必要不可欠な準備として、キリストと同じ罪なき肉体の状態を獲得しなければならぬと主張する。目撃者の談話によると、儀式中に狂信者達がオルガンやフルート、弦楽器やタンバリン、ホルン、更に大きなベースのドラムなどの楽器を用いて、強度の興奮状態を作り上げたと言われている。彼らは物理的証拠を追求し、叫んだり、祈ったり歌ったりし、ついには会衆の誰かが、座席から落ち、倒れて気絶する程であった。12人の男性がある理由があって、通路を行ったり来たりしていた。彼らは倒れている人があると、その人を説教壇まで引きずってくるのであった。それから十数名の人達が倒れている人のところに集まった。同じ時にある者は歌い、ある者は叫び、そしてある者は祈っていた。倒れていた人が意識を取り戻すと、その人はゲッセマネの経験を通った者達の中に加えられ、聖なる肉体を獲得し、天に移されるにふさわしい信仰を備えている者と見なされる。それ以来、彼は罪を犯し得ず、決して死ぬことがないと宣言される。教団の指導的立場にあったS.N.ハスケル長老とA.J.プリード長老は、これらの狂信の人々と会見すべくインディアナ州のミュンシーで1900年9月13日から23日まで催されたキャンプ・ミーティングに派遣された。1900年の1月には、この運動が進展していく様子が、当時オーストラリア滞在中であったホワイト夫人に示された。彼女はそれに対して警告と非難の証をしている。その証は次のようなものである。

———編集者

次に挙げる引用文の中でホワイト夫人は、楽器が誤って用いられたと述べている。人々は情景を支配す

るために、騒音と混乱を引き起こした。ホワイト夫人は、これに反対していた。彼女のコメントは「セレクトッド・メッセージ2巻」の31ページから39ページに読むことができる。次に挙げる引用文は、すべて彼女の書いたものであり、すべて「聖なる肉体」について述べているものである。

大声で叫ぶことは、聖化の証拠とはならない

「インディアナで開かれている集会における、騒音や混乱を伴う様子は、彼らが考え深く、知的な人々であるという印象を決して与えない。これらの感情表出の中には、自分達が真理を持っていることを世に確信させるものは、何もない。ただの騒音や叫び声は、聖化の証明にも、聖霊降下の証拠にもならない。あなたがたの荒々しい感情表出は、未信者達の心に不快感を与えるだけである。このような感情表出が減少すればするほど役者自身、また一般の人々にとってよりためになるであろう」(2SM, P.35)

「聖なる肉体」に関する章を読んで、それを私自身がペンテコステ教会で経験したものと比較すると、その2つの内に非常に著しい類似点を見ることが出来る。ペンテコステ教会は、強くシンコペーションとビートのきいた騒がしい音楽を、何度も繰り返し用いる。人々が手を叩き始め、音楽に乗って体を揺り動かし、曲のテンポはどんどん速くなっていく。そしてある時は通路で踊り出す。更に、ある者は歌ったり踊ったりしながら、教会堂の中を動き回る。彼らは霊にとりつかれているように見える。彼らはそれを聖霊だと言う。上の引用文を見て分かるように、ホワイト夫人は彼らに賛成してはいない。ペンテコステ教会で見られるこのような行為が、1900年に1度セブンスデー・アドベンチストの中で起ったのである。それは再び起るのだろうか？

騒乱を伴った礼拝

「主がその器を通して、御自分の計画や目的を遂行されるに当り、私達はその働きを、過大評価することはできない。あなたが描写した、インディアナで起っているような事が、恩恵期間の閉じる直前に再び起こることを、主は私に示された。ありとあらゆるみともない事が、公然と行なわれるであろう。ドラムを使った音楽に合わせて、大声で叫んだり、踊ったりするであろう。分別ある人達の感覚はすっかり混乱してしまうため、彼らのなす決断にはもはや信頼を置くことができなくなる。そしてそれが、聖霊の導きによるものといわれるのである」(2SM, 聖なる肉体の教理 36ページ)。

過去の歴史が繰り返される

「私はすべての痛々しい歴史に、触れるつもりはない。そうすることには耐えられない。だが今年の1月に主は、誤った理論や方法が我々のキャンプ・ミーティングに取り入れられ、それによって、過去の歴史が繰り返されることを私に示された。私は非常に心を痛めた。このような場所には、人間を装った悪魔がいて、良識ある人々に、真理に対する嫌悪感を抱かせるために、用いることのできるあらゆる策を弄していることを述べるように、私は命じられた。第3天使の使命という真理を、群衆の前にもたらず手段となってきたキャンプ・ミーティングが、その影響力を失うように、敵がその内容を取り決めようと試みていた」(2SM 聖なる肉体の教理 37ページ)

讚美の音楽

8年ほど前、あるセブンスデー・アドベンチストの学生宣教師が、安息日学校で私にある音楽を聴かせてくれた。聴いてみると、私はその音楽が、モダン・ロック音楽であるとしか考えられなかった。もっと注意して聴いてみると、「神を賛美せよ」とか、そんな言葉のバリエーションが聞こえてきた。彼はそれを賛美の音楽と呼んでいた。その歌詞や音楽で、私は何年も以前に行っていた、ペンテコステの教会のことを思い浮かべた。曲が終わったとき、私はその音楽が、セブンスデー・アドベンチストの音楽家達によって演奏されていることを聞かされたのである。これには私も、非常に驚いてしまった。当時アメリカにおいて、音楽が変化していたことを私は知らなかったのである。

私自身歌い親しんできた、昔ながらの賛美歌から必ずと言っていいほど伝わってくるような福音のメッセージが、その音楽には欠けていた。そこには何のメッセージもなく、いわゆる「賛美」の言葉が出てくるだけであった。これはまさしく、何年も前に私がペンテコステ運動の只中であって遭遇したものである。

私にその音楽を聴かせてくれた青年は、それについての私の意見を尋ねた。彼は、私の答えが気に入らなかったようである。前挙したホワイト夫人の引用文を思いつつ、終わりの時代にサタンは、魂を惑わすために音楽を用いるということを、私は彼に言った。私は彼に、サタンは現代の非クリスチャン的な音楽を、クリスチャン的な言葉でもって装うであろうと言った。私は彼に、歌詞を除けば、サタンの賛美歌と世俗音楽を区別することは、全くできないと言った。私は彼に、終わりの時代にサタンは、人々の心を支配するために、丁度このような音楽を用いるであろうと言った。最後に、私ができる限り親切に、私が聴かせてもらった音楽は、神からのものではなく、むしろサタンからのものであると言うのが私の意見であると、私は言った。彼はそのテープを取り、私から去った。

彼にそれ程はっきりと、自分の考えを述べたくはなかったが、明確に言わないことによって、その人を誤りに導くべきではないと考えたのである。私達の会話を聞いていた他の人達にも、誤った考えを持ってもらいたくはなかった。以来再び彼に会うことはなかった。つまりあれは、私が自分の信念を彼に知らせる、唯一の機会であったのである。彼の方から、私の意見をきいてきたのである。私はそれに応じただけに過ぎない。以来彼は、私の言ったことを何度も思い出したであろうと、私は確信している。

自分がサタンだったら

あなた自身、サタンの立場になって考えていただきたい。あなたはアドベンチストの教理をぶち壊したいと考え、音楽を通してそれをするにしようと、仮定する。あなたなら、はたしてどうするだろうか？ある日突然、老若男女すべての人に、新しいタイプの音楽を聴かせようとするだろうか。そうはしないであろう。どんな不適当な音楽も、まず偽装させなければならない。聴く人が、自分は神を賛美する音楽を聴いているのだと、信じるようにしなければならない。異教徒がするように、無意味な言葉を、繰り返し用いてはどうだろうか(マタイ 6:7 参照)。「神をほめたたえよ」とか、それに似たような言葉を、繰り返し用いるのである。キリストの大いなる犠牲や、永遠に渡る神の愛には、一切触れずに、ビートやリズムだけに集中する。そのような音楽を、時間をかけてゆっくり、教会に持ち込むのである。リベラル(自由主義的、穏健)な教会には、なるべく速く取り入れさせて、礼拝形式を大きく変えさせる。保守的な教会に対しては、もっと注意深くやらねばならない。他の教会がそれを受け入れるまでは、控えておいて、それからこれを他の教会では当り前のものとして紹介する。一番重要なのは、そのような音楽を以前教会員だった人達を、教会に引き込むものであっても、言えばよい。もしあなたがサタンだったら、どのようにするだろうか？

セレブレーション(祝典)教会

今日 SDA 教会の中に、「セレブレーション」と呼ばれる運動がある。この運動は、教会内に新しい人達や、教会を離れている人達を教会に呼び込むのに、非常に効果的な礼拝形式であると主張している。ほとんどの場合、伝統的な礼拝形式をやめ、代わりに歌や証を多用する。礼拝にドラムやギターが使われているのを、ビデオで見たことがある。私の友人の幾人かは、実際に行き、見て来たそうである。宗教的な言葉を除いては、そこで用いられている音楽は、今日の世俗音楽と何ら変わらない。手をたたいたり、ビートに合わせて体を揺らしたり、神をほめたたえる言葉を、何度も繰り返して言うのである。

私は自分の目でこれらの光景を見た訳ではないが、

噂を聴いただけでも、私の心は不安になる。私達は注意深くこれを見守る必要がある。上に挙げたホワイト夫人の言葉から、このようなことが SDA の教会やキャンプ・ミーティングに入って来ることを、私達は知っている。

どう判断すべきか？

私達の礼拝儀式にはもっと変化が必要であると、ある人達は言う。物事を新鮮味あるものにする必要があると彼らは言う。あるいはその通りかも知れない。神が私達に何を期待なさるか、私達はどのようにして知ることができるだろうか。私達は何をしたらよいのだろうか。私達が従うべき模範かガイドラインはあるのだろうか。答えは「イエス」である。これらのことに関して、神は私達を無知のままに放っておかれなかった。将来に起こることを、神は 100 年近く前にホワイト夫人を通して示された。「興奮や混乱ではなく、秩序と規律がなければならない。…恵みの内に成長するに当たり、興奮はふさわしいものではない。」ここで再び、主がホワイト夫人を通して語られた言葉を挙げる。聖なる肉体運動について書かれた、同じ章からの引用文である。

「主は御自身の定められた儀式に、興奮や混乱ではなく、秩序と規律を望まれる。我々は現在、未来に世界中で見られる光景を正確に描写することはできない。だが、このことだけは知っている。今は祈りつつ目を覚ましている時である。なぜなら、主の大いなる日が近づいているからである。サタンが自分の援軍を集めている。我々は考え深く、心を落ち着け、主が啓示された真理について熟考する必要がある。恵みの内に成長し、真の霊の純潔と聖化を受けるに当たり、興奮はふさわしいものではない」(2SM 聖なる肉体の教理 35 ページ)。

ビートによってコントロールされていないか？

最近、「ドクター・エデルの医学ジャーナル」というテレビ番組を見た。この中で、エデルという医者がある質問をした。それは「人がセックスよりも強い快楽を得られるものは何か？」という質問であった。答えの中には、食べること、夕陽を眺めること、音楽を聴くこと、等が上げられていた。正解は世論調査から得られたものではなかった。その結論は、脳波や唾液分泌の測定、またその他の科学調査から得られたものであった。

その答えは、音楽を聴くことであった。なる程多くの人達が、どこへ行くにも小さなテープレコーダを持ち歩くのも、うなずける話である。ドクター・エデルの調査報告が正しいものであるとすれば、これら多くのウォークマン愛用者達は、セックスの経験と同じし

ベルの快感を味わっていることになる。それだから、私達は音楽について、もっと注意深くあるべきなのである。サタンが私達の頭脳や信条をコントロールするために、音楽をもっと用いようとしているのは、このためである。

私達は次の質問を自らに問う必要がある。「私達が聴いているこのような宗教音楽から、私達は何を得ているのか？」と。肉体的な満足のために、ビートやリズムを楽しんではいないだろうか。また歌詞は、御子を死に遣わされる程、私達を愛しておられる神の大いなる必要を述べているだろうか。その音楽を聴くことによって、私達は以前にも増して神への祈りを捧げ、聖書を読み、罪に勝利するために、主に助けを求めようになっただろうか。あるいは、私達は音楽の内に「主の愛」を感じ、救われていることを確信するのだろうか。私達は礼拝のときに通る経験を信じて、それに依存するのだろうか。非常に注意しなければならない。私達が依存できるのは、経験ではなく、神の約束だけである。神が言われたので、私達はそれを信じる。ただそれだけである。

質問

質問 1 : なぜペンテコステ派の人々は、自分達の経験が必要不可欠であると信じるのか？

答：彼らは神の言葉を、本当に理解してはいない。ほとんどの人がそうであるように、彼らもイエスが十字架上で私達の身代りとなられた真の理由を、理解していない。これは彼らが、天の聖所のどの部屋を見上げているかを考えれば分かる。彼らは第1の部屋にいて、そこではサタンが、働きの主導権を握っている。それは信仰による義認の働きではない。「アンカー第8号」を読んでいただきたい。彼らは自分達の経験に依存しているのである。

質問 2 : なぜ彼らは、それをそんなに熱心に求めるのか？

答：彼らは、自分達が救われているという確信を与えてくれる、何らかの経験を望んでいる。異言のような超自然の経験は、彼らにそのような確信を与えてくれる。しかしながら、それは偽の確信である。聖書研究や生活の変化がなくても、そのような経験をすることができる。それから得られるものは、偽の安心感だけである。

質問 3 : それは終わりの時代に住むクリスチャンにとって、なぜそんなにも危険なのか？

答：それが危険なのは、何も終りの時代に限ったことではない。サタンは様々な形の行いによる義認の教理によって、沢山の人を破滅に迫りやってきた。経験に依存することは、すなわち行いに依存することであ

る。しかし「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」(ヘブル 11:1)

質問 4 : それは「現代の真理」とはどのような対照をなすか？

答：私達は実体としてのあがないの日に生存している。神は私達の生涯から、あらゆる罪を取り除こうと望んでおられる。これは、聖霊の限りない力によるものである。それは信仰によってのみなされる。世界に告げられる最後の警告のメッセージは、裁き、すなわち第3天使の使命と獣の刻印である。それが1888年に布告された信仰による義認のメッセージである。「アンカー第9号」を読んでいただきたい。人々が神の言葉よりも、自らの経験と外面的なしるしを信じることを、サタンは望んでいる。彼は、人々が神の経験よりも、見たり感じたりできるものに信頼を置くことを望んでいる。彼は人々が裁きに対する備えをするのを嫌う。そこで彼は、人々に偽の希望を与えようとするのである。

まとめ

聖なる肉体についての同じ章の中でホワイ夫人は、私達は神の言葉—御約束に信頼すべきであると述べている。

「真に御言葉を探り調べるすべての人は、その心を神に向け、聖霊の助けを請い願う。するとじきにその人は、生ける神の言葉に支持されない弱々しく、頼りない理論を語る教師のあらゆる架空の説をはるかに上回るものを発見する。これらの理論は、神の霊と生命は御言葉の内にあるという、初歩的な教訓を学ばなかった人々によって作り出されたものである。もし彼らが、御言葉に含まれている永久成分を心から受け入れていたら、センセーションを引き起こすために、何か新しいものを得ようとするすべての努力は、どんなにぱっとしない、つまらないものであるかを悟ったであろう。彼らは御言葉の第一の原則を学ぶ必要がある。そうすれば、彼らは人々のためになる生命の言葉を見だし、人々はじきに麦ともみがらを見分けるようになるであろう。イエスは御約束を彼の弟子達に託されたのである」—手紙 132、1900年(2SM 聖なる肉体の教理 39 ページ)

「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」(ヘブル 11:1)。

ミラー・デイビッド



サンライズミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471
Tel.0980-56-2783 | Fax.0980-56-2881

HP: www.sunriseministry.com | E-mail: info@sunriseministry.com